



Title	<解説・翻刻>貫嵐翁 浪華日記行
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1953, 8, p. 43-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浪華日記行解説

小島 吉雄

最近わたくしは、からだの調子を悪くして、「奥の細道ところどころ」が語文の締切日に間にあはない。それで、その埋めあはせのために、編輯部の諒解を得て、かねがね翻刻を予定してゐた福松藤助の「浪華日記行」を掲載することにした。「浪華日記行」は、かつて昭和十年三月雑誌「筑後」に活字翻刻せられたことがある。また昭和十六年三月発行の木谷蓬吟氏の「浄瑠璃研究書」所収「近松半二と穂積以貫」といふ文章中にも引用せられてゐる。従つて、この書は新規発見の珍書ではない。けれども、この書の記事には、安永九年ごろの大阪の浄瑠璃劇壇の消息を伝えるものがあつて、斯道の

研究家にとっては貴重な一資料だといはねばならない。わたくしはかねて在阪の浄瑠璃研究家から、この書を語文に再翻刻することを要望せられてゐたのである。「筑後」といふ雑誌は、福岡県の久留米市で発行せられてゐた郷土史研究の雑誌であるから、広く流布してゐず今日これを何処でも容易に入手するといふわけには行かない。だから、「浪華日記行」をもう一度翻刻し直すといふことは、無意味ではない。語文が今この計画を果し得るのは、西南学院大学教授清田正喜氏の厚意と斡旋とによるのである。清田氏は、西南学院大学論集第一巻第一号に、「浄瑠璃作者福松藤助」といふ文を書い

て、藤助の伝記と「浪華日記行」とを詳しく紹介してをられる。

福松藤助の略伝は、はやく既に「筑後俳諧史」に載せられてゐる。また、郷土史家竹下泣猿氏によつて、昭和三年九月「隠れたる戯作者」と題する藤助の詳伝が刊行せられてゐる由である。また、昭和二十一年五月に刊行せられた「ゐざりの唄」といふ馬場埋木の詩歌集の附録に、江崎伝氏が藤助並にその家系の年譜を載せてゐる馬場埋木も江崎伝氏も共に藤助の傍系血族である。清田氏の福松藤助伝は、江崎氏の年譜を参照しながら、松延家伝来の藤助自筆の自叙年譜にもとづいて執筆せられたものである。

福松藤助は、寛曆九年から全十二年まで、豊竹座所属の浄瑠璃作者であつた。「宇賀道者源氏鑑」「祇園女御九重錦」「岸姫松纏鑑」等の作に名を連ねてゐる。本姓は松延氏、名は種茂、通称を甚左衛門といふ。享保十八年五月二十三日、筑後国上妻郡福島町の大庄屋忠左衛門種方の嫡男として生まれた。福島町は、今は福岡県八女郡に属する。松延氏は、筑前岩屋城で戦死した、立花紹運の家臣で松延勤七郎といった者の後裔だといふ。甚左衛門種茂は、幼名を安次郎といつた。幼少にして穎悟、九歳より手習をはじめ、十二歳で四書五経の素読、十四歳で詩作を学び、冠句を試み、また久留米の俳人楓紅庵秋虎の門に入り、俳諧の発句を学んだ。俳名、時序庵竹城。十六歳の時、俳名を菅蘭渚と改め、祖父に同道して伊勢参宮。この頃から、大庄屋名代役を勤む。十八歳には肥後阿蘇へ、十九歳には宇佐八幡に参詣、二十歳には肥前長崎に赴き、城官助について中華の墨跡を修行したといふ。長崎へは、その後公用で二度、二十二歳の時と二十四歳の時とに出向いてをる。二十一歳で結婚、同年福島組大庄屋職を相続した。ところが、翌年二十二歳の時、百姓一揆に

逢ひ、居宅財宝悉く破却せられた。二十五歳の時、君用繁多のため逆上の病気が起り、役儀勤まりがたきを理由として退役の儀を願ひ出たが、官の免すところとならず、止むなく無断で国元を出奔、大坂へ出た。表向きは病気のためといふことであるが、内実には複雑した事情があつたらしく、これ以上庄屋職を勤めてゐると、一身一家の没落にも及ぶべき危険を感じて、出国したもののやうである。出奔は宝曆七年七月十三日のことであつた。それから、京と大坂との間を徘徊して職を求めたが、結局、大坂に在住して、戯作者たらんと志し、宝曆八年中の島の筑後屋松之助を受人として、大坂の住人となり、儒者福松藤助と名乗つた。そのためには宗門帳面につき必要があり、初代豊竹駒太夫の伴藤石衛門即ちのちの二代目駒太夫を同伴して西下、柳河藩領の西原村に至り、同地の江月院の帳面に直るといふことをしてをる。藤助と駒太夫とに特別な關係があつたことは、この一事でも察せられる。

宝曆九年二十七歳の正月、「宇賀道者源氏鑑」といふ物語を出版した。そして、これを出世作として、爾来、豊竹越前座の浄瑠璃作者となり、島の内トブ池筋の南木綿町に居を構へた。「清水清玄桜姫賤姫桜」の第四段目、「祇園女御九重錦」の大序と第四を藤助が書いた。共に駒太夫の持ち場であつた。

宝曆十一年には島の内南等屋町に転宅。曾根崎新地の芝居で「曾根崎様書置の段」を執筆、此太夫が章を打つてゐる。その後、「道頓堀に豊竹座の新築が成つたので、その新舞台で「人丸萬歳臺」を出し、苗字上りの格で作者仲間の筆頭となる。二十九歳のことであつた。その翌年三十歳の時、「岸姫松」を出した。これは並木永輔の述作を添削したもので、特にその第二段目を藤助が浄瑠璃に書改

めた。竹本鐘太夫が章を打つた。ところが、この作品を最後として、その年の五月十三日、大坂を出立、故国筑後へ歸つた。九月十三日、柳川藩領の西原村に居を定めた。

藤助は、なぜ突然郷里へ歸つたのか、そのわけは明らかでない。帰国後の彼は転々として居を改めた。宝曆十三年三十一歳の七月肥前の田代に移り、翌年及び翌々年豊後の日田に遊び、その後、明和五年三十六歳に柳川藩領の山崎に住む。明和八年三十九歳に至つて、故国への帰参がかなへられ、十二月二日、福島旧宅に歸り住んだ。安永二年四十一歳、雪中庵蓼太の門に入り、紫雪庵官蘭と改号、これより俳諧の宗匠として身を立たした。四十三歳、父忠左衛門死す。四十七歳、安永八年、妻大病につき、忠見村に転住。忠見村は妻の里方のあるところである。天明元年九月二日妻佐野病歿、享年四十二、藤助この年、四十九歳。この冬、福島へ歸る。天明八年五十六歳、俳名を橘雪庵貫嵐と改む。やがて江戸深川の雪中庵より俳諧判者の免状を受けた。翌年五月梅月庵と号する隠居所を建てて移り住む。寛政七年六十三歳、二月中痛み、舌の上に腫物生じ、食事自由ならず、次第に悪化し、翌寛政八年八月十五日六十四歳を一期として、白玉楼中の人となつた。

藤助は、大坂を去つて郷国に歸つたのちも、戯作の筆を断たず、「太宰府御利生記」「奥州千歳萩」「忠身京物語」「武蔵国鎧渡」その他、数部の物語を書いてゐるが、それらは、今は残つてゐない。彼の郷里筑後に於ては、浄瑠璃や読本の作者藤助としてよりも俳諧師貫嵐さんとして、その名がとほつてゐる。その句には

枕して枕ながむる夜永かな

寒月やさうざうしくも独酒

晩鐘を夜明ときくや煤払

等が佳句として挙げられる。

「浪華日記行」は、安永九年、当時、豊後の日田に滞在してゐた藤助が、十月八日に日田を発つて大坂に行き、久しぶりで、豊竹駒太夫に会ひ、近松半二らと快談し、自作売り込みを策し、また大坂の芝居を見物などして、十二月初旬筑後の忠見村に帰り着くまでの日記であるが、全文、縁語掛詞を用いた七五調で、如何にも浄瑠璃作者の筆にふさはしいものである。本の躰裁は、美濃半紙半截の袋綴横本で、縦十三種三、横十九種二、表紙共に六十七枚。墨付は六十四枚、一行約十二三字詰の一面九行にしろされてゐる。表紙には、「貫嵐翁浪華日記行」としるされてゐる。恐らく後人の名づけしるすところであらう。次に白紙一枚を置いて本文になるのであるが、本文の内題には「浪華日記行 草案」としるされてゐる。これは藤助自身の題するところであらう。元来が草稿本であるから、走り書きの可成り読み解きにくい文字もある。濁り仮名には濁点をつけないのが普通であるが、ところどころ附けてゐるところもある。また往々にして、宛字を書いた所もある。複製に当っては、すべて原本どほりとした。その他、句毎に句点が打つてあるが、すべてそれは朱の圈点を以てしてゐる。また、ところどころに墨で削除加筆のあとを示してゐるが、これは作者の推敲を示すものである。複製には、句点はつとめて原本どほりとし、本文は訂正の文に従つた。漢字に振仮名を附したものであるのは、これも原本に従つたのである。

以上、清田正喜氏の福松藤助伝にもとづいて、この解説をものした。ここに、この書を複製するに当り、清田正喜氏と、この書の所載者である江崎伝氏とに謝意を表する。

なほ、本文については、脚注を必要とするところが尠くない。しかし、それを試みるときは、印刷上手数が繁雑になるので、今はわざとそれを避け、註は後日を期することにした。

因みに、藤助はまた戯号を東助とも陶芋とも号した。陶芋といふのは、唐芋の洒落であらうといふ。これは清田氏の説である。とういもは、彼の生國に於ける甘藷の方言である。また、福松と名乗つたのも、彼の生地福島の福と松延氏の松とを採つたものらしい。前にも述べた如く、藤助は何度も長崎に向向いてをる。大阪を引き払つて帰國したのちも長崎行脚を試みてをる。従つて唐音にも通じてをったやうだし、「じやがたら文」といふ作品を駒太夫に売りつけてゐるといふこともあつて、その見聞知識は相當に広汎だったらしい。一生を作者として送つたならば、脚色家として期待すべきものがあつたかも知れない。しかし、その文章家としての力量は、この「浪華日記行」の示すやうに、あまり大したものではない。

貫
嵐
翁
浪
花
日
記

web公開に際し、画像は省略しました

(上) 貫嵐翁「浪華日記行」表紙 (下) その第一頁

web公開に際し、画像は省略しました

(上) 同書最終記事

(下) 同書奥書